

マタイによる福音書 21:1-11

世界聖餐日を迎え、今年も世界中の主にある兄弟姉妹と、主の聖餐を分かち合う機会が備えられました。ただ、その起こりはそう遠い昔のことではありません。それは、第二次世界大戦が始まる少し前のことでした。対立と分断を深めつつあった当時の世界情勢の中で、聖餐を通して主の教会が一つとなり、命の回復が図られるのを願ってのことでありました。そして、日本の教会がこの活動に加わったのは戦後すぐのことです。以来、毎年この日を覚えて、世界中の教会と主の聖餐を分かち合ってきたのが私たち主の教会に属する者でありました。ということですので、聖餐を共にするということは、自分だけが救われて、ああ良かった、ということではありません。それゆえ、このことは、聖餐についてのみ言えることではありません。分かち合いが私たちの信仰の本質であるように、私たちがこうして聞いている御言葉についても同じことが言えるからです。なぜなら、教会が神への愛と隣人への愛を語るということは、本質的に、根本的に、信仰が自分だけの事柄では終わらないことを私たちが信じている、ということでもあるからです。それゆえ、今日は、世界中の教会とすべてのものを分かち合っていることを特に意識して、ご一緒に御言葉に聞いて参りたいと思います。そこでその私たちに与えられている御言葉が教会暦では受難週の最初の日、棕櫚の主日に聞くことの多いこの御言葉です。

ここでは、数々の奇跡を行い、また様々な尊い教えを説いてきたイエス様に魅了された大勢の人々が、まさにイエス様と一塊になって神の神殿に進んでいく様子が描かれています。それゆえ、この日、この姿の中に私たちは主の恵みを分かち合う者の姿を見ることにもなるのでしょうか。そこで群衆はこう叫びます。「ダビデの子にホサナ。主の名によってこられる方に祝福があるように。いと高きところにホサナ」と。そして、彼らのこの絶叫が示すところは、救われたことへの感謝であり、聖なる場にあることの喜びです。けれども、イエス様に関する人々の理解は、私たちとは多少異なるものでもありました。御言葉はその最後のところで「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と人々の評価

をこう記すのですが、しかし、イエス様は、数多ある預言者の一人であったわけではありません。そのイエス様について教会が伝統的に語ってきたことは、イエス様が大預言者であり、王であり、大祭司ということでした。それは、イエス様の担った役割がある限られた範囲のものではないからです。そして、それは今日の御言葉の中でも語られていることです。イエス様が王として神の都への凱旋を今まさに果たそうとしているのはそれゆえのことでもありますが、ただ、群衆の評価がどうであれ、私たちがイエス様にお従いするのは、その類い希な能力に魅了され、その力を信奉したからではありません。

イエス様が救い主メシア、キリストであると私たちが理解しているのは、イエス様が神様の独り子であり、このお方が我が身をもって命の道を拓くに至ったからです。そして、それを明らかにしたのが、イエス様の十字架の道のりでもありました。ところが、群衆にはそれが分からなかった。図らずもそれが明らかになったのが先ほどの最後の言葉です。けれども、そうであるからといって、群衆に対して私たちは知ったような口をきくことはできません。それは、イエス様にお従いする彼らにとっては、十字架はこれからの出来事であったからです。ですから、万歳三唱をなすその姿は、救いへの期待の大きさを現すと同時に、その理解、評価がいかに足りなかったかを言い表しているように思います。それゆえ、十字架を知って、彼らの間違いに気づいている私たちは気持ちを高ぶらせることにはいささかの迷いもあるのでしょうか。けれども、神様は無意味な感情の抑制を私たちに望んでいるわけではありません。そうではなく、むしろ、私たちのそうした素朴な気持ちをととても大切にしているのです。

「主の名によって来られる方に、祝福があるように」とあるこの御言葉は、神殿の前で歌われる礼拝式文の一つであると言われています。つまり、群衆の高ぶりは、礼拝に臨む者の心境そのものを表しているということなのです。ですから、これについては、私たちがこれまで何度も経験してきたことであり、まさにこれこそが毎週日曜日の私たちの姿であり、また、世界聖餐日を

迎えた主の教会の姿でもあるのです。そして、このことはまた、私たちが何かを期待する時、それが実現した時のことをイメージするように、神様とイエス様もまた、それと同じことを私たちに期待しているということです。それは、終わりの日を迎え、神の国に進み行く時、「ホサナ、ホサナ」とこう口にするのが、こうしてイエス様に従っている私たちであるからです。それゆえ、この日の言葉がこうして私たちに与えられているということは、世界聖餐日を迎えた私たちにとってはとてもふさわしいことでもあるのでしょうか。それは、聖餐が十字架と切り離すことができないように、イエス様に従い、イエス様と一塊となって終わりの日を目指す私たちの歩みは、この日の御言葉をもって始まる十字架のイメージを分かち合えばこそそのものだからです。

ですから、私たちは分かったつもりになるのではなく、この時の群衆と同じ眼差しをもって十字架の歩みを始めたいと思うのです。ただし、感情を高ぶらせつつも、同時に御言葉が語らんとしているところにはしっかりと目を向けたいとも思うのです。それは、感情を高ぶらせる熱量の大きさだけでは、その期待通りの結果を伴わない時、傷つくことを恐れるが余り、信仰生活を含めて、すべてのことを自分の手の届く範囲に納め、それでよしとしてしまうところが私たちにはあるからです。ただ、そう考えることは、それ以上傷つく可能性を極力抑えられることから、一見すると正しいことのようにも思えるのです。けれども、イエス様に従い、私たちが十字架に進むということは、誰一人として傷つかずに終わらないものでもあるのです。しかし、だから、人を傷つけ、自分をも傷つけていいということではありません。歓呼の声ををもってイエス様を迎え入れた私たちが、十字架へと向かうその過程において、どうして傷を負うことになるのか、そして、それにも関わらず、その私たちがどうしてその傷が癒やされることになるのか、十字架の道を辿る中で私たちが経験するのはこのことなのです。

そこで思い出すのが、先月の日毎の糧にあった箴言の御言葉の一節です。それは、「神に従う人が幸いを得れば町は喜び、神に逆らう者が滅びれば歓声を上げる」という箴言 11 章 10 節の御言葉であります。私がこの御言葉を思い出したのは、それがイエス様がエルサレムに入城された際の群衆の気持ちを現していると考えたからです。つまり、幸いを得て歓呼の声を上げる

だけでなく、同時に、逆らう者の滅びをも喜んでいると、私たち人間にはそういうことがあるなど、そう思ったからです。従って、この日の御言葉が「大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、他の人々は木の枝を切って道に敷いた」と、その時の光景をこう記すのは、まさに、敵が滅ぼされ、国に平安と幸いをもたらされたからだ、つまりは、それが、凱旋將軍さながらに人々がイエス様を迎え入れた際の人々の心境そのものではと、そのように思ったのです。けれども、そこでまた思うのです。十字架を経験した私たちが、礼拝の度毎に声にするイエス様への歓呼の声とは、そのように世俗の王が戦いに勝ったか負けたかを喜ぶようなものなのかと。ただ、そう思うのは、それでいいのか、ということをお皆さんに申し上げたいからではありません。

御言葉がゼカリヤ書を引用し、王であり、祭司であり、預言者であると、世を救う神様の独り子の到来をこのように語り、また、イエス様ご自身も、その預言が実現されるべく、弟子たちに命じてその備えをなしたように、ここに記されていることは、神様の平安と祝福が具体的に世にもたらされたことを伝えるものです。そして、その中で、御言葉は、神様の約束の言葉として、「シオンの娘に告げよ。『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ロバに乗り、荷を負うロバの子、子ロバに乗ってる』」と語るのです。ですから、私たちの目の前にあることは、この御言葉通りのことがまさに今起きているということであり、それゆえ、その姿は救われた者のそのままの姿を現しているとも言えるのでしょうか。けれども、そこで興味深いのはエルサレムの内側にいた者の姿です。御言葉は、「イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、『いったい、これはどういう人だ』と言って騒いだ」と記すのですが、この御言葉は以前の口語訳聖書では、「これは、いったい、どなただろう」と訳されているものでもありました。それが新共同訳聖書では、多少砕かれた形で「一体、これはどういう人だ」とあるのですが、ある学者が言うには、その意味合いとしては、ここには、もっと蔑む気持ち強く表れているのだそうです。つまり、「こいつはいったい誰なんだ」と、不信感が強く表れてたのがエルサレムの人々の反応であったということです。

そして、この不信感が高じて、やがて群衆をも巻き込み、イエス様は十字架へと向かうことになるのですが、けれども、イエ

ス様の十字架の出来事は不測の事態によるものではなく、神様によって初めから定められたものでもありました。しかし、この時点では、それが現実のものとなるとは、喜ぶ者も、冷やかにその光景を眺めている者も、誰一人としてそうは思っていないのです。つまり、誰の心にもイエス様の十字架は思い描かれてはいなかったということです。それは、十字架が予測できなかったからではありません。弟子たちには再三十字架が語られていたように、少なくとも弟子たちだけは知っていたのです。ただ、まだ現実となっていないはなかった。それゆえ、十字架は人々の熱狂によってかき消されることになったのです。そこで、救いへの期待感からイエス様にぐっと近づいているその目を少し離して、イエス様と群衆の姿を見つめ直したいと思うのですが、すると、ここでのことはどのように私たちの目に映るのでしょうか。

イエス様が乗っているのはロバです。それも子ロバであって、そこには馬に乗って勇ましく凱旋する将軍の姿はありません。ですから、その姿は滑稽だとも言えるのですが、ところが、この滑稽さが十字架の出来事の始まりであると、御言葉はこう語るのです。それは、かつての移動手段の主流が馬ではなく、ロバであったように、ダビデ以前の古めかしい王の姿を現そうとしていたということです。ですから、私たちの感覚からすれば、それは、時代祭の時代行列を見ているようなものなのもかもしれません。それゆえ、ローマの力による支配の実情を知っている者には、それが座興の戯れ程度にしか感じられなかったとしても不思議ではありません。力に対してそれ以上の力を示すものではなく、言うなれば、古の雅を語るに等しいものでもあったからです。ならばイエス様に従う群衆はどうであったのか、その中に紛れてしまっている弟子たちはどうであったのか、その喜び大きければ大きいほど、彼らの眼差しは、イエス様が見つめる現実とはほど遠いものとなったのです。なぜなら、その喜びの大きさは、「イエス様の世」が訪れたことを知らぬがゆえに、自分の気持ちだけに溺れるものでもあったからです。従って、この計算尽くでないところに、無邪気に喜ぶ者の素直さと、そのもの悲しさを感じないわけには参りません。ただ、私たちがそう思うのは、この喜びが間もなく破れることを知っているからです。

では、イエス様はどのような気持ちでその場に身を置いているのでしょうか。それ

について、御言葉は何も詳らかにしていません。ただ、イエス様がそれなりの覚悟を持って臨んでいたのは間違いのないことです。それは、この後の定めをイエス様ははっきりと知っていたからです。ですから、それは無謀なことだとも言えるのでしょう。何も好き好んでと、人々がそう思ったとしても仕方のないことです。けれども、十字架は、ドンキホーテのように、イエス様が世間知らずであるがゆえのことではありませんでした。ここに至るまでの道のりがすべてを物語っているように、人がいかにものを考え、いかに動くのかは、イエス様には十分すぎるくらいに分かっていたからです。ですから、この、それでも、というところに、冷笑家、犬儒学者はますます滑稽さを感じるのでしょうか。けれども、私たちが十字架から感じる悲しみが、もし冷笑家らの感じるこの滑稽さの裏返しでしかなかったとすれば、それはイエス様が見ているものからはかけ離れたものとなってしまいます。なぜなら、十字架の悲しみは、イエス様の気の毒な境遇にあるのではなく、十字架の意味すらも分からない、私たち人間の姿そのものを映すものだからです。

御言葉が預言し、イエス様の十字架によって現されたものは、この世の王が力をもって力に打ち勝つようなものではありません。御言葉がそのイエス様について「柔和な方で、ロバに乗り」と語るように、馬に乗り、世界地図を書き換えることが、十字架が目指すところではないからです。まただから、イエス様も山上の説教の中で「柔和な者は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ」と語るのです。それは、私たちの信仰の本質が分かち合いであるように、地上における覇権、権力の確立を目指してはいないからです。なぜなら、この柔和さによって現されるものは私たちの罪の贖いであり、この、ありのままのイエス様に触れるために、私たちは、十字架に向かったのこれよりの時を過ごすことになるのです。それは、私たちがこの道を歩むればこそ、罪赦され、イエス様と共に御国を嗣ぐことになるからです。けれども、私たちが御国の世継ぎとされるということは、そこには明らかな矛盾が置かれています。冷笑家、犬儒学者が十字架の出来事を滑稽と感じるのはそれゆえのことでもありますが、けれども、この矛盾こそが罪ある私たちの現実そのものであり、そして、この矛盾の中に置かれているものが、私たちに与えられている罪の赦しでもあるのです。

今、私たちは何を見ているのでしょうか。それは十字架と甦りを経験しようとしている私たちの主イエス様です。けれども、そのイエス様のことを、群衆も、また、エルサレムの人々も、もしかしたら私たちも、本来見つめるべきものとはまったく違った、別のものを見つめているのではないでしょうか。それは、今、目の前にあることを見つめて思うことは、イスラエルが遠い昔に置いてきた淡い期待のようなものでもあるからです。つまりは、昔を懐かしむように、あるいは、今ある現実以外は認めないぞといった頑なな態度で、イエス様のことを見つめているということです。それは、私たちの気持ちの中には、想定外のものを退ける気持ちと、昔を懐かしむ気持ちがない交ぜになっているからです。つまりは、自分の期待にそぐわない形で、私たちはイエス様のことを見つめることが出来ないということです。けれども、イエス様と十字架の歩みを共にする中で、その根底から覆されるものがこの私たちの気持ちでもあるのです。ですから、十字架を通して、私たちが深く傷つくことになるのはそれゆえのことでもありますが、けれども、私たちが負うことになるその傷は癒やされ、淡い期待は大きな希望となって私たちの目の前に置かれることになるのです。そして、そのことを知らしめるために、柔和なお方であるイエス様が傷つく私たちと十字架の道のりを共にしてくださっているのです。

私たちが柔和なイエス様のことを、優しい、温かいと言ったりすることがありますが、では、それは、御言葉の語るどころが私たちの期待に違わないものだからなのでしょう。イエス様と十字架の歩みを共にする中で、この期待は必ず裏切られることになります。そして、それは、ある意味で、私たちが素直に正直にイエス様を信じよう、信じようとしているからです。そして、私たちがそうしよう、そうねばと思うのは、神様の造られたこの世界に生きることが、同時に「天の御国」にすでに生きているということをつかずにいるからです。そして、私たちがイエス様と共に十字架に向かって最後の時を過ごし、知らされるのはこのことでもありますが、それは、イエス様が柔和なお方であるということと同じように、イエス様によってもたらされたこの救いの現実を知るには、経験が必要としているからです。つまり、十字架は頭の中だけですまされるのではなく、それゆえ、心の中だけで整理尽くせるもの

ではないということです。具体的に実際に腹に落ちてこそそのものであり、そういう意味で実際に味わうことなくして分かるものではありません。そして、それを知らしめるために、イエス様は十字架に向かって私たちと歩みを共にされるのです。

イエス様と共に十字架に向かって歩み、私たちは深く傷つくことになります。けれども、私たちが負うことになるその傷は私たちがたった一人負うものではありません。イエス様という、負う必要のないお方が共にその傷を負って下さっているのです。そして、そこに現されるものがイエス様の柔和さであり、それゆえ、この柔和さを知った者が地を受け継ぐとイエス様は仰るのです。それは、イエス様と共にある私たちとイエス様とのこの関わりは、私たちが御国に入る日までずっと続いていくものだからです。そして、それを明らかにしたのがイエス様の甦りの出来事でもありました。ですから、ここに、つまりは、十字架と復活のこの出来事の中に、神様の私たちとの関わり、私たちがこの世界を見つめるうえでのその眼差しが現されることになるのです。

ただ、終わりの日はまだ訪れたわけではありません。それゆえ、十字架の悲しみはまだまだ続くことでしょう。その中で私たちは自らの偽らざる姿を見つめることにもなるからです。けれども、その私たちとイエス様はずっと共に歩み続けて下さっているのです。その中で、私たちの淡い期待は、歓呼の声を上げる群衆、弟子たちのように裏切られることにもなるのでしょうか。けれども、その私たちがイエス様と一塊となって御国を目指しているのです。目指す中で、イエス様がいかなるお方であり、そのイエス様を信じる私たちがいかなる者であるかを、イエス様が柔和なお方であるがゆえに私たちは知るのであります。そして、それが私たちの歩みであり、生涯でもあるのです。そして、この私たちの生涯は、主にある兄弟姉妹との御言葉と聖餐の分かち合いの日々でもあるのです。ですから、御言葉と聖餐を通してイエス様の命を共に分かち合うことができるなら、イエス様に従った弟子たち、大勢の人々がそうであるように、私たちは希望をもって与えられたその命を全うすることになるのです。祈りましょう。